

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川赤十字病院医学雑誌（1987.02）1巻:42～45.

当科における重複癌27例の検討

宮本和俊、石川雅彦、表由晴、松下元夫、柴野信夫、菱山
四郎治

当科における重複癌27例の検討

旭川赤十字病院外科 宮本和俊 石川雅彦 表由晴
松下元夫 柴野信夫 菱山四郎治

Key Words : 重複癌, 三重複癌, 同時性重複癌, 異時性重複癌

近年, 各種癌の治癒率の向上に伴い重複癌症例の報告が増加してきている。我々は, 昭和51年1月より, 昭和60年11月までの10年間に27例の重複癌症例を経験したので, 若干の考察を加え報告する。

1. 症 例

1879年 Billroth¹⁾により初めて重複癌症例の報告, 診断基準の記載がなされた。以後, Warren & Gates(1932)²⁾を始め様々な重複癌の定義がなされている。今回我々は, 判定基準として日山ら(1984年)³⁾の定義; 二つ以上の腫瘍があってそれぞれが原発と考えられる場合 ①異なる部位であれば同じ組織型でも重複とする ②同じ部位では, 組織型が異なる場合重複とし, 組織型が同じ場合は多発癌とする ③三ヶ月以上診断の間隔がある時, 異時性とする ④対側臓器での発生は重複癌として取り扱う: に基づき発表する。当科における重複癌症例は, 同時性重複癌5例, 異時性重複癌24例であり, このうち三重複癌症例は2例であった。(表1A~C)

2. 結 果

1) 性別及び年齢分布(表2, 3)

性別頻度を見ると, 全体では男性14例, 女性13例と性差は見られなかったが, 同時性重複癌は4例とも男性であり, 三重複癌は2例とも男性であった。

次に第一癌診断年齢で見ると, 男性の平均は67.5才, 女性の平均は55.9才であり有為に女性が低かった。

2) 発 現 間 隔(表4)

重複癌の第一癌診断から, 第二癌診断までの期間は, 1年未満の症例6例, 1年以上5年未満の症例12例, 5年以上10年未満の症例3例, 10年以上20年未満の症例4例であった。男性の平均は16.9ヶ月, 女性の平均は66.7ヶ月であり, 明らかに女性において診断間隔の長い症例が多かった。

3) 重複癌の組み合わせ(表5)

重複癌27例の系統臓器別組み合わせは, 共に消化器系である組み合わせが13例(48%)と最

A STUDY ON 27 PATIENTS WITH MULTIPLE PRIMARY MALIGNANT NEOPLASM

Kazutoshi MIYAMOTO, Masahiko ISHIKAWA, Yoshiharu OMOTE, Motoo MATUSHITA, Nobuo SHIBANO and Shiroji HISHIYAMA

表1 当科における重複癌症例

A. 二重複癌男性例

症 例	第一癌部 位・年齢	第二癌 部 位	第一→第 二癌期間	組織型
1, K. H.	胃 64	胃	同時性	異
2, T. K.	胃 72	前立線	3ヶ月	/
3, Y. S.	胃 51	胃	6ヶ月	異
4, H. K.	胃 64	腎	2年	/
5, T. K.	胃 70	大腸	6年	不明
6, K. K.	大腸 73	腎	同時性	/
7, N. I.	大腸 81	大腸	同時性	異
8, K. S.	大腸 69	大腸	1年	異
9, Y. K.	大腸 73	胃	3年	不明
10, Y. G.	大腸 84	大腸	4年	異
11, M. H.	前立線 70	胃	1年	/
12, S. S.	腎 71	胆嚢	2年	/

B. 二重複癌女性例

症 例	第一癌部 位・年齢	第二癌 部 位	第一→第 二癌期間	組織型
13, K. T.	L-乳房 47	L-乳房	1年	異
14, K. M.	L-乳房 69	総胆管	5年	/
15, S. K.	L-乳房 31	L-乳房	13年	異
16, M. T.	L-乳房 31	胃	16年	異
17, M. N.	子宮 74	大腸	3年	/
18, H. A.	子宮 68	大腸	10年	/
19, K. A.	胃 64	大腸	4年	不明
20, E. S.	胃 35	子宮	5年	/
21, S. O.	胃 57	L-乳房	9年	/
22, T. N.	大腸 52	子宮	3ヶ月	/
23, O. W.	大腸 73	大腸	1年	異
24, S. K.	総胆管 74	胃	4年	/
25, A. K.	卵巣 52	大腸	1年	/

C. 三重複癌症例

症 例	第一癌部 位・年齢	第二・第三癌 の部位、期間	組織型
26, H. S.	大腸(盲) 54	大腸(下),大腸(直) 同時性 4年後	第一≠第二=第三
27, T. I.	大腸 49	胃・総胆管同時性 10年後	/

も多く、次いで消化器系と泌尿生殖器系との組み合わせが10例(37%)であった。

第一癌と、第二癌の系統臓器別発生頻度を検討すると、第一癌、第二癌いずれも消化器系の癌である頻度が最も高く、それぞれ18例(67%),

表2 性別頻度

	男	女	計
同時性重複癌	3(2)	0	3(2)
異時性重複癌	9(2)	13	22(2)
計	12(2)	13	25(2)

()内は3重複癌

表3 重複癌の年齢分布

年 齢	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
男	0	(1)	1(1)	3	6	2	12(2)
女	3	1	3	3	3		13
計	3	1(1)	4(1)	6	9	2	25(2)

()内は3重複癌

表4 重複癌の男女別発現間隔

発現間隔	男	女	計
1年未満	5	1	6
~5年	5(1)	6	11(1)
~10年	1	2	3
~20年	0(1)	3	3(1)

()内は3重複癌

表5 重複癌部位、診断時期の検討

	男 性 (14例)	女 性 (13例)	全 体 (27例)
部 位：一方が大腸癌	8	6	14
一方が胃癌	8	4	12
一方が乳癌	0	5	5
組合せ：大腸-大腸	4	1	5
胃-大腸	4	1	5
胃-胃	2	0	2
乳房-乳房	0	2	2
胃-乳房	0	2	2
大腸-子宮	0	2	2
第一癌発症年齢(平均)	67.5 歳	55.9 歳	
第一癌診断から第二癌 診断までの期間(平均)	16.9ヶ月	66.7ヶ月	

19例(70%)を占めていた。一方、泌尿生殖器系は、第一癌として5例(19%)、第二癌として5例(19%)、乳癌は第一癌として4例(15%)、第二癌として3例(11%)であった。また同時性重複癌5例中4例が消化器系癌と消化器系癌の組み合わせであった。重複癌27例のうち、一方が消化器系癌の症例は25例(93%)であった。また三重複癌症例2例は全て消化器系癌の組み合わせであった。

次に重複癌を臓器別に検討すると、第一癌の頻度は、大腸癌が最も高く9例(33%)、次に胃癌8例(30%)、乳癌4例(15%)の順で高かっ

た。第二癌についても大腸癌が11例(41%)と最も多く、次に胃癌が7例(26%)と続いている。男女別に重複癌の臓器別組み合わせを見ると、男性では一方が胃癌である組み合わせが8例(30%)、一方が大腸癌である組み合わせが6例(45%)と多く、これに対し女性では一方が乳癌である組み合わせが5例(19%)、一方が卵巣癌である組み合わせが4例(15%)と女性に特有な癌の比率が高かった。また女性では一方が大腸癌である組み合わせは6例(27%)であった。

3. 考 察

重複癌は、1889年 Billroth¹⁾により初めて報告され、判定基準が設けられたが、その基準が厳しすぎ、1932年 Warren & Gates²⁾ 1958年 Moertel³⁾らが新しく判定基準を定めた。しかし、同一臓器で2つ以上の癌の組織型が異なる場合の取扱い、同時性と定める期間の長さ、対称臓器での発生を重複癌として取り扱うかどうか等の定義が曖昧であり、今回我々は、1984年の日山の定義³⁾により重複癌の判定を行なった。重複癌の発生頻度は近年著しく増加しており、日本病理集報⁴⁾では、胃癌を含む重複癌の頻度は過去15年間に2倍となっている。その背景には ①癌治療率の向上 ②社会の高齢化 ③発癌物質の増加 ④剖検時の精査(前立腺、甲状腺) ⑤放射線治療による二次発癌 ⑥抗癌剤による二次発癌など様々な原因が考えられている。

我々の施設においては、昭和51年1月より昭和61年11月までの10年間に全身麻酔下悪性腫瘍1次手術例708例中、重複癌手術例は33例(4.6%) (患者数は27例)であった。過去10年間の男性の全身麻酔下悪性腫瘍1次手術331例中、重複癌手術例は17例(5.1%)、女性は377例中16例(4.2%)と、やや男性に頻度が高かった。胃癌手術では、男性141例中8例(5.7%)、女性71例中4例(5.6%)、大腸癌では、男性158例中9例(5.7%)、女性111例中7例(6.3%)と発生頻度に男女差はなかった。乳癌は163例中5例(3.1

%)であった。諸家の発生頻度報告は、剖検例で、Warren & Gatesは29,740例の悪性腫瘍中546例1.84%、中村⁶⁾らは71,856例中1,121例1.26%、赤崎⁷⁾らは1,478例中23例1.6%と報告している。臨床例では阿南⁸⁾らは悪性腫瘍患者236例中31例2.1%、龍村⁹⁾らは236例中19例8.1%と報告している。

年齢では50~60代に多いとする報告が多かった。当院症例では第一癌診断時の年齢平均は、男性で67.5才、女性で55.9才と、男性の方が高齢であった。また第一癌診断から第二癌診断までの期間の平均は、男性が16.9ヶ月であるのに対し、女性が66.7ヶ月と長かった。女性の初発年齢が低く、且つ、第一癌診断から第二癌診断までの期間が長いのは、女性に特有な乳癌、子宮癌が比較的若年で発症し、予後も良い事が影響していると思われる。これに対し、男性は、比較的高齢で消化器系癌で初発し、短期間のうちに消化器系癌の重複を見る例が多く、三重重複癌2例は何れも男性の消化器系癌であった。また、27例中25例(93%)に消化器系癌が関与しており、うち12例(44%)が消化器系癌の重複であった。諸家の報告においても消化器系癌の占める割合は60~80%と高いが、我々の施設ではどちらか一方に消化器系癌の占める割合は93%となっている。これは施設による疾患の偏りに原因があると思われた。

4. 結 語

昭和51年1月より、昭和60年11月までに経験した重複癌症例27例について報告した。同期間における全身麻酔下悪性腫瘍1次手術症例中、重複癌手術は4.6%であった。重複癌症例中どちらか一方に消化器系癌の占める割合は93%と高かった。

各種癌の治療率の向上により、重複癌の報告は増加しており、今後は、男性若年消化器癌、女性若年乳癌、子宮癌などの第一癌の術後患者の診療においても第二癌の発生を考慮に入れていく事が重要であると思われた。

(本稿の要旨は、第48回 日本臨床外科学会
北海道支部例会：昭和60年12月7日：において
発表した)

文 献

- 1) 文献2)より引用
- 2) Warren, S. & Gates, O. : Multiple primary malignant tumors : A surgery of the literature and a statistical study. Amer. J. Cancer, 16 (11) : 1355—1414, 1932.
- 3) 日山 與彦・他：重複癌の疫学。癌の臨床, 30(12) : 1499—1506, 1984。
- 4) Moertel, G. C. et al. : Multiple primary malignant neoplasms. Cancer, 14 (2) : 221—230, 1960.
- 5) 日本病理学会編：日本病理剖検集報 第9—23集。日本病理剖検集刊行会，東京，1967～1981。
- 6) 中村 恭二・他：組み合わせよりみた重複癌の検討。癌の臨床, 18 (9) : 662—666, 1972。
- 7) 赤崎 兼義・他：原発性重複癌について。日本臨床, 19 (8) : 1543—1551, 1961。
- 8) 阿南 敏郎・他：当科における重複癌31例の検討。外科診療, 6 : 691—701, 1980。
- 9) 龍村 俊樹・他：当院における重複癌症例の検討。癌の臨床, 25 (11) : 1126—1130, 1979。